



情報工学研究院
機械情報工学研究系
准教授

林 英治 先生

ロボティクスコミュニケーション

- ロボットがあるとき -

ロボットとは

ロボットと聞いて何を連想するでしょうか。人型ロボット(ヒューマノイド)、福祉・介護などでしょうか。“ロボット”の技術や名称は、機構設計、計測・制御、メカトロニクスに始まり、さらに情報技術が加わり、2000年以降は学術的にも定着してきています。人工知能、ホームロボット、ミリタリー、ヒューマノイド、医療、ロボティクスソフトウェアなどに分類され、さらにそれらの中で技術的なアプローチに分かれます。それらのさまざまな技術は分野・分類を超えて活用されているのです。デジタルカメラを例にとれば、今のカメラは人の顔や笑顔などを認識しており、一昔前であれば考えられないことですが、ある意味ロボットであると言えます。

ロボットのIdentity

ロボットは、人のある役割を代替することを目的に開発がすすめられています。これまでの身近なロボットは状況を認識して適切な行動を実現していますが、当然、作った以上のことはしないのです。ならば開発者が想像・創造しうる限りを作りこめばと考えられますが、人工知能のフレーム問題の壁にあたるでしょう。が、期待を込めて認識・理解から想像・創造へ、動作から振舞いへと変遷するならば、ロボットのアイデンティティへの配慮が必要になってくるとも考えられます。このようなレベルになると、もはやロボットは唯一無二の存在を示す爬虫類か哺乳類ぐらいの人工生物になっているでしょう。「爬虫類か哺乳類？」と首を傾げられるかもしれませんが、家で共生しているペットを想像してください。非常に可愛らしく存在を主張し、長きにわたり飼主とコミュニケーションを行っていますよね。人は興味を持つ以上に飽きるのが得意なようですが、私も例外ではありません。日々を飽きないために想像・創造することに努めています。なぜなら自分がロボットとなり、人に飽きられてしまうことだけは避けたいからです。そして、いつか私の傍らにいてくれるロボットを想像し、どこかに落ちているかもしれない本質を探し求めつつ、ロボットの研究開発を行っています。